

ソウルと台北における文化遺産防災の比較研究

Comparative Research on Disaster Mitigation of Cultural Heritage in Seoul and Taipei

吉越 昭久

Akihisa YOSHIKOSHI

I. 2008 年度の研究概要

2008 年度において、筆者は以下の 3 つの課題に関する研究を実施した。

まず、2007 年度後期に学外研究を得て行ったアジアの諸都市における文化遺産の防災に関する研究であるが、現地調査の結果を検討した。この研究はまだ完了していないが、本稿ではその途中経過について報告する。

次に、歴史都市における文化遺産の防災に影響を与える都市の水文環境の変化については、いくつかの学術雑誌(東京大学空間情報科学研究センター*Discussion Paper*¹⁾、*Science of Total Environment*²⁾、日本水文科学会誌³⁾など)に発表してきた。都市は、水文環境を変化させながら発展を遂げてきた経緯がある。その結果、近年になって河川流出はより急激な増加をみせるようになり、洪水の危険性が高まってきたことが指摘される。しかし、幸いなことに文化遺産は、比較的安全な場所にある傾向があるために難を免れてきたが、このような水文環境の変化が今後も継続するようであると、文化遺産も洪水の被害を受ける可能性は否定できない。

他に共同研究として、13 世紀の平安京における火災の発生について、その空間構造を研究⁴⁾してきた。その研究の中で、火災の頻発する場所、火災の少ない場所が存在することから都市の発達過程を明確にすることができた。この研究は、これまで全く焦点があてられなかった課題を指摘した。また、それだけでなく過去の火災と都市の発達過程の関係は、建築構造の違いがあるとはいえ将来の都市の発展と火災の関係を予測するのに大きなヒントになると考える。その意味で、学術フロンティア推進事業の研究に大きく貢献できると考える。

II. ソウルと台北における文化遺産防災の比較研究

1. 目的・方法

ソウルと台北は、第二次世界大戦まで日本統治を受けてきたことと、地理的に近い位置にあるために日本と歴史的に深いつながりをもってきたことでは共通する条件を持つ。しかし、それ以前の都市の起源やその後の発達過程、および戦後の経緯は大きく異なっている。

特に、都市の内部(あるいは周辺部も含めて)に分布する文化遺産について、どのような防災対策がなされてきたかを比較研究することは、学術フロンティア推進事業の研究としては、意義のあることかと考える。このためには、二つの国・地域において、まず文化遺産の防災にかかわる法律や行政についても検討した上で研究を進めねばならないが、まだ十分に進展していないのでそれらの研究は今後の課題としておきたい。

そこで本稿では、両都市における現地調査を踏まえ、文化遺産の立地環境と防災の考え方の相違点について比較検討してみたい。このような観点に立った研究は、管見する限りにおいてこれまでほとんど行われていないようである。

その方法は、前述したように 2007 年と 2008 年に実施した現地調査と、これまで刊行された多くの地図などを利用して比較することである。対象とする時期は、近代以降としたい。この期間には、外邦図が使用できるし、それ以外にも両都市に関するかなりの数の地図が刊行され公開⁹⁾されているために、本研究を可能にしている。

2. ソウルの都市発展と文化遺産の立地環境

ソウルは、1394 年以来李朝の首都となり漢城と呼ばれた。李朝末期になると、国際的な紛争の影響を強く受けるようになった。まず、その頃の市街地をみてみよう。



図 1 「朝鮮城市図」1830 年

図 2 「京城府管内図」1934 年

図 1 は、1830 年作成の「朝鮮城市図」(上が東)である。市街地のほとんどが、城壁の中に含まれていて、城壁の外には東と南にある関廟程度しか描かれていない。この地図にみられる現在の国宝(文化財保護法によって定められた文化財)に指定されている文化遺産には、景福宮・崇礼門(南大門)・昌徳宮・昌慶宮・宋廟があるが、これらは全て塙で囲まれた建造物として描かれている。他にも、文廟・景纂宮・永禧殿・景禧宮や、多くの門などがみられる。この地図には、河川と主要な道路が描かれているだけで、一般の住宅などは示されていないが、この時期のソウルはまだ典型的な囲郭都市の様相を呈していたことがわかる。

1910 年になると、ソウルは日本統治を受けて京城と改称された。その頃の地図に 1907 年刊行の「最新京城全図」があるが、それには市街地は街道に沿って東と南西にも広がりを見せはじめたことが知られるが、基本的にはまだ城壁の中に展開していた。この時期の地図あたりから、測量

に基づいて作成されるようになり、道路や主要な建物なども記載されてくる。地図をみる限りあまり明確にはわからないが、前述の文化遺産に関していうと、撤去・移転などの影響は受けていないようであるが、この時期に刊行された地図からは、官庁や各国の公館などが建設され始めたことがわかる。同じく1910年の「京城市街全図」では、既に景福宮の一部に、法典調査局や騎兵隊などが造られたことがわかるし、1927年刊行の「京城市街図」では景福宮の中心部に総督府の大きな建物があったことが判明する。孔子を祀る文廟は、この時期には現在の成均館大学校に取り込まれてしまったことがわかる。市街地は、城壁を越えて広がったため、城壁だけでなく多くの門も消滅した。図2は、1934年に刊行された「京城府管内図」(上が北)である。この他に、1936年の「大京城精図」をみても、慶熙宮(最初、慶徳宮と呼ばれた)のあった場所に、京城中学校、付属小学校が建てられていることが読み取れる。ここはもともと15代国王の離宮として1623年に造られた建物があった場所であった。現在では学校は撤去され、当時の建物の一部が復元され、公開されている。

米軍政下の1946年になると、都市の名称はソウルに統一され、行政的には京畿道から離れて特別市を構成するようになった。都市化が進行し、市街地は城壁を越えて周辺地域に及び、1936年には市域を囲郭都市の時代の4倍に拡大させている。

ソウルの建造物の中で、日本統治時代のものを使っているケースはあまり多くなく、現存するものとしては市庁・貨幣金融博物館(旧朝鮮銀行本店)・ソウル駅があるくらいである。ソウル駅は最近まで使われていたが、現在では近代的な駅に生まれ変わり、旧駅舎の一部は鉄道博物館として使われている。逆に、取り壊された建造物が多い。例えば、旧総督府は政府庁舎として、その後国立中央博物館として使われたが、1995年になって解体・撤去され、現在はその跡地にもとの景福宮が復元されつつある。

3. ソウルの文化遺産への災害の危険性

ソウルの地盤は、花崗岩の基盤が地表面近くに存在し、そこに薄い堆積層がのる形になっている。基盤は、周辺の山地・丘陵地にあらわれ、その表面は花崗岩そのものないしは風化層・マサに覆われ、植生は概して貧弱である。城壁に囲まれていた旧市街地は盆地にあり、比較的平坦ではあるが、花崗岩の基盤がところどころで露出しているために小さな起伏がみられる。

このような自然条件があるために、ソウルの旧市街地における自然災害は、土砂災害と洪水にほぼ限定される。まず土砂災害であるが、山麓の傾斜変換点付近には山地からの土砂の流出があつて、ここは危険な場所である。しかし、世界遺産などの文化遺産はそのような場所には存在しないために危険性は少ない。

一方、洪水についてみると、ソウルの旧市街地はあまり安全な場所ではない。現在のソウルの中心部には河川があまりみられないが、図1には清溪川に南および北から小河川が合流している様子が描かれていて、かつてはかなりの数の河川があったことは確かである。このように、河川が少ないということは、都市化に伴って大きな出水が旧河川付近にみられるようになるために、洪水の被害を受ける危険性に結びつく。

ところで、第二次世界大戦後になると、この清溪川を暗渠化してその上を高速道路にする工事が行われたが、2005年には清溪川は復活されて大きな話題となった⁶⁾。現在の旧市街地には、清溪川が東流しているが、特に都市の中心部付近では整備が進み、優れた河川景観をみせている。他に、現在のソウル市街地の南部には、大河・漢江が西流しているが、ここでの洪水は旧市街地にある文化遺産には直接影響を及ぼさない。

他に、人為的災害について若干触れておこう。ウエスティン朝鮮ホテルの裏にある園丘壇は、天子が皇帝を祭る祭祀を行う場所であったが、1913年に朝鮮総督府がここを取り壊して朝鮮ホテルを造った。しかし、一部は残され貴重な文化遺産となっている。ところが、この付近で、近くの企業やホテルの従業員が多数、休憩時にタバコを吸っている。貴重な文化遺産でタバコを吸う危険性は、市民にはどのように認識されているのであろうか。

他に、昌徳宮の例を記したい。ここは、李朝第3代王の太宗が1405年に建てた離宮である。1500年代後半に一度焼失したが、すぐに再建された。この昌徳宮は、ソウルにある王宮の中でも最も保存状態がよく、周辺の自然と共に李朝の趣がよくわかるといわれている。ソウルの都心にありながら大きな敷地をもつために、内部では騒音などは感じないが、場所によって周辺の高いビルや塔が不自然にみえてしまい、このあたりの配慮(建物の高さ制限、あるいは宮内の木々を高くして視線を遮断するなど)は今後必要になるであろう。人為的災害としては、火災(古い施設にはオンドルがある)の可能性も考えられるが、多くの文化遺産には小さな消火器と少数の消火栓程度しかみあたらず、防災には積極的という印象は受けない。聞くところによると、観光客を引率する方式をとっていることが対策と考えているというが、あまりに消極的な対策であろう。

この危険性が最悪の形で現れたのが、2008年の南大門(正式名称は、崇礼門)の焼失事件である。南大門(図3)は、花崗岩の土台の上に木造の二重楼閣が建つ壮麗な門であり、韓国の国宝第一号に指定されていた。李朝の木造建築物では最古のもので、まさにソウルのシンボリックな存在であった。これまで道路の真ん中に取り残され、ロータリーになっていたが、2005年に門の前に広場ができて中まで入れるようになった。しかし、これがあだとなって、放火により炎上するという結果になった。



図3 焼失以前の南大門(2007年11月撮影)

他に、人為的災害とはいい難いが、課題もある。それを、門に関する事例で示そう。前述のように、ソウルには城壁と道との交差する場所には門が設けられていた。門のいくつかはまだ残されているものの、城壁は市街地ではほとんどみることはできない。ただ、北部には李花女子大学校の東大門病院裏(東)のようにまだ城壁が残されている箇所がある。しかし、周辺の建物は、城壁の景観を考慮して立地していない。

このように、ソウルには検討する余地のある課題が多い。

4. 台北の都市発展と文化遺産の立地環境および災害の危険性

台北は、1875年に清政府によって台北府が設置されたことで本格的な都市としての形を整え、1885年に台湾省の省都となり近代都市として発展することになる。1895年に日本統治が始まり、台湾総督府がここに置かれて、道路などのインフラの整備が行われた。図4は、1895年に刊行された「台湾台北城之図」(上が西)であり、台北の初期の状態がよくわかる。ここは現在の台北駅の南にあって、総統府を中心にほぼ方形になった場所にあたる。初期の台北もまた、城壁で囲まれた囲郭都市で大南門・東門・北門などによって外部とつながっていた。城壁は、日本統治時代に取り壊されたが、北門は当時の姿で残されている。この地図には、台北には天后宮・文廟・武廟・聖王廟などがあったことがわかる。しかし、これらは北門以外、現存していない。都市としての成立当初の文化遺産はほとんど現在にまで連続していないことになる。図5は、測量によって作られた「正式測量地図」(上が北)であり、同じ年の刊行である。内容としては、県庁・総督府・軍隊・官舎・病院の他、一般の市街地も描かれている。また、城壁の内部はすべて市街地ではなく、耕地やため池などもあり、城壁外と同じような景観の場所もあったのである。

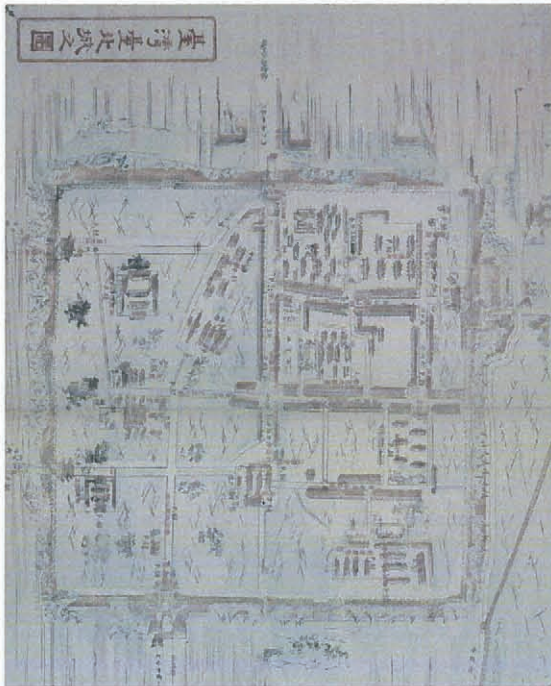


図4 「台湾台北城之図」(1895年)



図5 「正式測量地図」(1895年)

その後刊行された1905年の「台北市区改正図」や1914年の「台北市街図」では、市街地が拡大した様子がわかる。当時の台北市街地は、この台北城を中心に、淡水河とその支流の基隆河・新店溪に挟まれた比較的狭い範囲にあった。その後、さらなる市街地の拡大に伴って、主に基隆河周辺にみられた湿地や河川の曲流部を埋め立てたり、淡水河周辺に存在した多くの池も埋め立てられたことがわかる。

従って、台北にはソウルのように古い歴史をもつ文化遺産は存在しないが、宗教施設や観光資源としての文化遺産は多い。台湾には、世界遺産に指定された文化遺産は存在しない。また、文化遺産は文化資産保存法により指定されるが、十分に整備されているとはいえない⁷⁾。そこで本稿では、台北の市街地にあつて歴史的、宗教的に重要と思われる文化遺産を中心に考察することにする。対象は、北門(図6)・総統府・孔子廟・龍山寺とする。(これらの妥当性については、今後検討を要するであろう。)

これらの、文化遺産は、いずれも淡水河右岸の低平地にある。河川の河口付近は両側から丘陵地が迫り、台北の市街地は盆地の中に存在する形となっている。このため、淡水河周辺は洪水の危険性が高く、これまで頻繁に被災してきた。淡水河の近くの商店街には、洪水の危険性を知らせる看板があり、地元でもそのような認識はされ対応策はとられている。

また、台北には厚い堆積層があるために、地震が発生すればかなりの揺れが発生するであろう。付近には南西―北東方向の断層が数本走っていることが確認されている⁸⁾。地震に伴う被災の危険性は高い。また、山麓の傾斜地には住宅や故宮博物館などの施設が存在する。ここは、大量の雨によって土石流の危険性がある場所でもある。いずれにせよ、文化遺産の立地環境ということでは、台北は危険性の高い地域にあることは明らかである。



図6 北門(2008年2月撮影)

5. 台北の文化遺産防災の考え方

台北の文化遺産への災害の危険性という観点からすると、前述のような立地環境にあるために、自然災害の危険性はかなり高いといえる。しかし、これらに対する積極的な対応はほとんどないようである。これには、台湾の人々の意識や考え方ともかかわりがあるように思える。このあたりをいくつかの事例からみてみたい。

国立台湾大学は、日本統治時代に設立された台北帝国大学を起源とする大学である。そのキャンパスには低層の建物が統一性をもって並んでいて、景観的には優れている。大学の建物は新しいものがないようにみえるが、実は修理や立替をしても、周囲と同じレンガを使うなど、配慮があるためにそのようにみえるのだという。

しかし、上記のような事例はあるものの、台湾の人々は概して古いものを大切に作る習慣はなく、最近になってようやくそのような関心が出始めたのだという。このために、古い文化遺産が存続しにくい事情があったのではないかと考える。

台北では、日本統治時代の建物が本来の目的で利用されているケースがある。その代表的なものが総督府である。総督府は日本統治時代の本拠地となった建物で、1919年に完成された。美しく頑丈な建物であるために、現在でも台湾政府の建物として使用されている。台北では、日本統治時代の建物をうまく使っていて、景観の一部を構成しているようにみえる。ソウルでは、日本統治時代の建物はほとんど残さずに、むしろ積極的に韓国の建物に置き換えて言ったケースとは対照的である。

しかし、大きく変えられた場所もある。台北を代表するホテルで、日本の観光パンフレットにもしばしば登場する円山ホテルがそれである。ここはかつての日本が建設した台湾神社のあとに、鳥居などを取り払い中国の宮廷を思わせる風水にかなったホテルを建てて、世界的に有名になった。しかし、最近そのすぐ下に高速道路が通って風水が崩れたといい、現在では必ずしも台北を代表するホテルではないという。

台北では、古いものにあまり関心がないということは述べた通りであるが、近年の変化について述べてみたい。バラバラであった町並みを統一性のあるものにつくり変えようとする試みが行われている場所がある。淡水河の近くにある龍山寺は、1738年に創建された台北では一番古い寺である。本尊は、中央に祭られた観音菩薩であるが、その後ろにある建物には道教の神々が祀られているという変わった寺で、多くの参拝者や観光客を集めている。現在、その周辺の町並みの修景工事の最中である。完成すれば、台北の文化遺産であり観光名所の一つ、龍山寺周辺が面的に整備されることになる。この事例を通して、信仰する人々と観光客がいかに共存するか、新しい建物と景観との調和など、台北の人々の考え方に変化は起こるであろうか。

6. おわりに

ソウルと台北の文化遺産防災について比較検討してきたが、都市の発展と文化遺産の立地環境には大きな違いがあることがわかった。筆者は、日本統治を受けたということを共通点として比較したのだが、両都市の文化も環境も異なるために、結果としては大きな違いがみられた。

木造文化圏においては、石造文化圏に比較して文化遺産の保存には一種の難しさがある。アジアの歴史都市において、今後文化遺産をかたくなに守る方向に進むのか、あるいは災害を防ぎようのないものだと考えて文化遺産の防災を半分あきらめてしまう方向に進むのかは、本稿でのケースをみる限りでは判然としない。しかし、知識や技術を共有して、文化遺産防災の方向に進まなくてはならないことはいうまでもない。

前述のように本研究では、まだ両国の制度や行政の対応などに関する検討はほとんど行っていない。今後、その方面の研究を進めると共に、比較研究を通してそれぞれの特徴を浮き彫りにし、本研究を進展させていきたい。

引用文献

- 1) 吉越昭久ほか(2008)「都市の発達に伴う水文環境の変化と地下に及ぼす影響」東京大学空間情報科学研究センターDiscussion Paper, No.88,pp1-11
- 2) Akihisa YOSHIKOSHI et al.(2008)“Hydro-environmental changes and their influence on the subsurface environment in the context of urban development” Science of the Total Environment, STOTEN-11032, pp1-7
- 3) 吉越昭久(2008)「都市域の水文環境研究の視点」日本水文科学会誌 38-3(掲載予定)
- 4) 塚本章宏ほか(2009)「13 世紀平安京における火災発生地域の復原—GIS を用いた都市空間構造の分析—」日本地理学会 2009 年春季学術大会発表(予定)
- 5) Seoul Museum of History(2006)“The Maps of Seoul” Seoul Museum of History,p248
劉文駿編(2004)『古地図台北散歩—1985 清代台北古城』河出図社、台北市、p71
など
- 6) 黄祺淵 邊美里(2006)『清溪川復元—ソウル市民葛藤の物語—』日刊建設工業新聞社、相模書房、p.377
- 7) 楊 恵亘(2007)「台北市による歴史的建造物の再利用方策に関する研究—台北市文化局所有建造物の事例に見る空間と運営の評価—」東京大学大学院都市工学専攻 2006 年度修士論文梗概集、pp1-6
- 8) 林 俊全(2004)『台湾的天然災害』遠足文化、台北縣、p189